

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第8回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

日時：2019年1月15日（火）15:00～16:30

場所：釧路地方合同庁舎 4階 第3会議室

【出席者（敬称略・順不同）】

< 専門家 >

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

< 学校教員 >

- ・鶴居村立鶴居小学校 中川 道高
- ・鶴居村立下幌呂小学校 柴田 康吉

< 学校教育行政機関等 >

- ・北海道教育庁釧路教育局 教育支援課 主査 富田 和臣
- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 畠山 和彦
- ・釧路町教育委員会 教育部 指導主事室 室長 加藤 誠一
- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 蠣崎 浩一

< ワーキンググループ事務局 >

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所
国立公園課課長補佐 桑原 靖則
釧路湿原自然保護官事務所 矢部 敦子
- ・公益財団法人北海道環境財団 久保田 学、山本 泰志、安田 智子

事務局 第8回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ（以下WG）を開催する。

（配布資料、出席者の確認後、富田委員、加藤委員より自己紹介）

以降の進行を高橋座長にお願いする。（以降、高橋座長により進行）

議事1 ワーキンググループの取組み報告

事務局 資料1について説明。

高橋座長 参考資料3ページから4ページにある標茶小学校の発表ボードは作成途中のものか。

事務局 12月7日に撮影したもの。

蠣崎委員 明日始業式で1月23日に学習発表会となるので、12月段階でほぼ完成版と聞いている。

高橋座長 パネルを活用した学習について、発展させるにはどうすれば良いか考えていきたい。

まずは、モデル授業として鶴居小学校の3年生の事例が報告されているが、中川委員から補足やご感想をいただきたい。

中川委員 3年生の担任をしており、総合的な学習の時間で主に湿原についての学習を進めている。説明の中で課題として挙げられていたが、本・インターネットに頼ることではしか進めていけないことを6年間やってきて課題に感じる。幸いなことに鶴居小学校では、温根内木道を年に4回から5回歩かせてもらって学習する機会はあるが、それでも本やインターネットで対応せざるを得ないというところがある。自分の中でも子どもたちにつなげていきたいという思いがあり、再生事業地に子どもたちをいれさせたいと考え、このような取り組みをさせてもらった。感じるということが一番大切にしたい。湿原は近くにはあるが、子どもたちには遠い存在で、泥炭の感覚を味あわせてみたかった。初めて湿原に入り、水が染み出ることや、これまでは泥炭は泥のイメージだったが根がびっしりあること、地球が揺れている感覚がすごいといった言葉が出てきて、3年生にとっては、そういった感覚がとても貴重であった。これから小学校、中学校と学んでいく土台となる良い学習ができた。

高橋座長 鶴居村の小学校は湿原との距離という部分ではとても恵まれた環境にあるが、資料中で問題点として指摘されているように、一般に釧路市内の子どもたちにとってみると、1回しか出かけられないということは、学習を深めるためには難しいという意見が出ている。そのあたりはどうか。

柴田委員 1回ではなく何度も出かけられるにこしたことはない。最初は感想や体験ですごいなという感覚を持ち帰るが、そこから何が住んでいるのか、どうして跳ねたのかという疑問を持ち、文献検索や、人の話を聞いて深めていけると、自分の予想や思いが乗って実験や観察ができる。資料と実際の体験がつながってくるという意味では、やはり2回から3回行けることが望ましい。さらに言えば、特に3年生、4年生には因果関係の理解が難しいので、湿原と湿原ではない場所の比較ができると良い。砂の場所では跳ねない、湿原では跳ねたであったり、何メートル掘ったらここは水が出るが、違う場所では水が出ないといった体験があれば、感覚として理解していくことができる。下幌呂では農家は湿原を畑に代えていくことを頑張ってきた。畑に変えて代えてきて頑張った人もいれば、そのままの湿原が素敵だよという人もいる。そういったことも含めて、様々な環境と比較しながら結び付けていけると、子どもたちの中で良さも悪さも含めて理解できていくのだと思う。

高橋座長 本やインターネットなどの情報源だけに頼らないためには、仮説を立てたり、調べて考えたものを検証するために、もう1度湿原に行くというのは最低限必要なのであろう。2回湿原に行く計画を作ることができれば、学習を深める、調べ学習だけに頼らないといった課題を乗り越えることができるのではないかと思うが。

事務局 現実的には1回しか湿原に行けない学校が多い。釧路湿原で感じたことを持ち帰り、体験的に調べる事は身近な環境でやっていくしかない。身近な環境の事をわかっていない中で、子どもたちは、湿原は特別な場所というイメージが先行してインターネットでの調べ学習に頼ってしまう。湿原のことを調べるには、ある程度インターネットに頼らざるを得ないとしても、関心を持ったテーマについて身近な環境で体験的に学習し、それを湿原と比べるといった方法を提案していくという事が大切になってくる。

高橋座長 このような形で終わらず、もう少し深める学習形態を考案していけるとよい。

蠣崎委員 湿原でのフィールド学習を複数回実施したいという事であれば、標茶町であれば行事バスを出して計画的に運行すれば、行政として協力できるが、それぞれ市町村にバスの運行ルールがある。標茶で言えば、標茶小学校や標茶中学校などは中心校なので、周辺の学校よりはバスを多く出すことができる。周辺の学校についてはスクールバスと併用になるので回数は限られ、何回までという一応の目安がある。学校としては学習に活用したい題材は湿原だけではなく、違う活動での運用もしていきたいということになれば、回数が限られている中で1回は湿原学習に使うというのが正直限界な部分もある。

総合的な学習の時間には70時間という枠があり、その中の何十時間かを釧路湿原の学習にあてる。様々な学習で必要な時間を調整していくと、湿原での体験的な学習には1回5時間、6時間が精一杯ということになってくる。移動時間で半分以上はとられるので実質は90分程度しかフィールドでの活動時間がない。そのように考えると、それに代わるものも考えていく必要がある。バーチャルリアリティや、webカメラで現地と繋がるなど、バーチャルに湿原を体験できるようなものがあればよい。予算的なこともあり現実的には難しい部分もあるかと思うので、静止画、動画を含めて、ワーキンググループのWEBサイトに掲載していければ良い。1回しか湿原に行けなくてもバーチャルで複数回体験できるということになれば、広がりが出るのではないか。

さらに、標茶で言えば、標茶高校が持っている様々な資料やデータを小学生に向けて高校が発信してくれている部分もあり、そういう意味では標茶町はまだ恵まれている。釧路市は学校数も多いので非常に厳しい条件が多くあるであろうし、それぞれの町で事情が変わってくる。

畠山委員 釧路市では小学校26校のうち、湿原の学習を行っている学校は半数ほど。実際にフィールドに行けず、図書やインターネットで調べながら行っている学校も多いだろう。中央小では市のバスを活用したが、そうでない場合は保護者負担ということになる。小学校では社会見学として消防署など、様々な施設を見学する学習があるが、それを湿原用に振り向けられるわけではない。市のバスは1台しかなく、複数学級がある学校は現実的には移動に使うことはできない。移動の課題が解決できればやってみたいと思っている学校もいくつかあるだろう。

高橋座長 総合的な学習の時間もかつてに比べて減っており、その中で学習することも幅広いので、釧路湿原だけに時間を費やすことはできないのは理解できる。一方で、少しだけ扱って済ませるとなると、教育的な効果という面から見ると中途半端になる危険もあると思うが。

加藤委員 釧路町では、学校によって湿原との距離に差がある。釧路町も行事バスという扱いでバスを出すことは可能だが、次年度何回程度必要という事を年度初めに計画を立てて申請するため、新しい年度に入ってから利用回数を増やすという事は難しい。学習そのものを考えていく上では、いずれかの学年で年間を通して湿原をしっかりと学習するという事も、大変有意義であると思う。参考資料にあるパネルを見ても、湿原を対象としながらも学習課題は児童によって違う。例えば湿原に2回行ったとしても2回目に全ての子どもたちの課題が検証されるとは限らない。その時のタイミングや環境があるので、何度か通う中できつ

けを見つけていくことが学習の中では大切になってくるが、移動といった物理的な問題は解決していかなければならないと感じる。歩いて行けるようなところであれば、毎日でも行きたいところだが、なかなか難しい。

高橋座長 確かに様々な制限が多くあるが、工夫して考えていかなければならない。

富田委員 学校の意向によっても考え方が変わってくるので、その中で例えば1回しか行けないのであれば1回の中でどう効果を出すかというところを個々の学校の状況に応じて考えていかなければならない。

境委員 標茶小学校については、釧路湿原に1回しか行けなくとも、標茶高校のフィールドに行くことが可能であれば、自分たちの近くのフィールドで学習を深めていけることは良い事だと思う。3年前に初めて標茶小学校の発表会を見た時に、研究動機を聞くと先生に勧められたからと子どもたちは答えた。誰かからもらったことをしていたという意識しかなかった。今年は、自分の言葉で子どもたちは答えるようになってきた。これはすごい成果。先生方も意識的に変わってきており、子どもと一緒に調べることが楽しくなっている。例えばヤチマナコがどこまで深いのかと子どもが課題を持ったとき、それは先生にもわからない。子どもたちと一緒に調べて畑に穴を掘り水を入れ、どのようになるか調べる。そのように課題を解決しながら子どもたちの結論を導こうというプロセスを大切にしている。子どもが疑問に思ったことに対して自分なりに様々な解決法を練り、失敗したとしても、もっと続けてみたい、だからもっとやってみようという気持ちになる。そういった子が増えており、3年間でとても変わった。

中央小学校も発表会を見せてもらったが、初めての取組みということもあり、子どもたちの課題そのものがまだ自分たちに落ちていないと感じた。一方で、発表の中で、例えば、釧路湿原は昔海だったと子どもが発表すると、本当に海だったのかと子どもたちの議論が始まる。違うんじゃないか、舐めてみたらどうなんだろう、水を取ってきて蒸発させて中に塩が残るかどうかやってみてはと。こういった議論はひとつの成果だと感じる。このほか、湿原の植物がたくさんあると結果を出して発表したけど、本当かと聞かれ、本当かどうかわからない時に、そこから調べ始める。学校の周りには、植物は何種類くらいあるのか、昆虫はどのくらいの種類がいるのか、木は何種類くらいあるのか、いずれも子どもたちはわからない。湿原は植物が多いというのは本当なのか、学校の方がいっぱいあるかもしれないと言われた時に、子どもたちは学校の周りも調べてみようと言いはじめた。それで良いのだと思う。湿原に1回行った事によってひとつの調べるきっかけになっていく。学校教育として総合的な学習の時間のあり方や、教科との関連のあり方としても、湿原が良いきっかけになると思う。発表の後に様々な課題が出てきた時、6年生で教科単元に振り分けてさらに詳しくやってみたら良い。このように1回しか行けない場合の良いプロセスを考えていけば、もっと普及する事ができるのではないかと感じた。

畠山委員 発表を聞くと、テーマにかなりの個人差があると感じた。3,4人の発表しか聞くことができなかったが、詳しく知りたい、何種類いるのかというテーマを挙げていた。指導者の力量という部分も出てくるが、掘り下げてあげることが必要と感じた。5年生の発表の様子を4年生が聞いていた。中央小学校では総合的な学習の時間のカリキュラムを改めて検討しており、5年生の学習で湿原をしっかり位置付けていくことを検討されている。今年度の内容をもとに4年生がレベルアップしてくれると思う。

高橋座長 数年の間で急速に生徒の感覚が育ってきているように感じる。評価も問題点もあると思うが、翌年どうしたらより進められるか、具体的に評価いただけるよう、パネルを活用した学習を広げていきたい。

境委員 柴田委員は湿原以外でパネルを活用されていたが。

柴田委員 グループ学習で活用した。総合的な学習の時間で、地域に住む名人を紹介するというテーマの学習でパネルを使わせていただいた。グループで使ったため、1枚ではおさまらず、数枚使った。パネルはレイアウトが自由にきくので、場所が限られた時に使いやすく、畳めるので工夫してちょっとずつ見せるなど、動くということを子どもは上手に使っていた。3面に分かれているので、画面割りというところで子どもたちはイメージ持ちやすかったようで、役割分担も行い易く、ボードで囲む感じの空間ができるところも良い。

高橋座長 ボードは模造紙に比べると立体的な感覚があり、今後、さらに発表にバラエティが出てくることを期待したい。

議事2 取組みの広報、普及に向けて

事務局 資料2について説明。

高橋座長 3項目に分けて事務局から説明があったが、それぞれについて意見を伺っていききたい。まず、教員研修講座の実施に関して、毎年継続できるように務めているが、効果的に行うにあたって、意見を伺いたい。

畠山委員 釧路教育研究センターの研修講座については、現在企画中であるが、今まで同様に入れられるように検討している段階。時期なども含めて、今後相談しながら企画を進め、次年度も残していけるように調整していきたい。

高橋座長 時期も大切になってくる。学校で行事バスを利用するというのを考えた時、集中する時期はあるか。

畠山委員 時期による集中はある。早い段階で周知すると検討する先生はいると思うが、単学級のところでなければ使えない。

蠣崎委員 先ほども申し上げた通り、標茶町は環境としては比較的恵まれている。バスの台数もスクールバスが多く、行事バスとして併用している。ただし、スクールバスは下校時刻までに学校に戻らなくてはならないという制約があるので、朝に子どもたちを降ろしてから下校時間までしか使えない。小さい学校だと小回りが利くので何とかなるが、結局は学校の考え方になる。釧路小学校の地域探求学習の発表を聞く機会があり、学校としてもコミュニティ・スクールと連動させてやっていくという強い意志があるので、70時間の内の45時間を春採湖の学習に割いている。例えばそんな取り組みを広く管内で共有することが出来れば、そんな大胆な発想もあるのかと考える学校も出てくるかもしれない。

学習指導要領の中でも地域探求は大変重要視されてきており、標茶町では、新しい年度に向けて、故郷学習というかたちで見直しの働きかけを行っていく。行政方針としても入れ込んでいく。町長の意向でも故郷を見直す教育を推進するというものが公約にもあり、我々はまずその実現に向けて足元をしっかりと固めるところからスタートしなくてはならない。その中で、釧路湿原は標茶町の45%を占めており、行政としても、どのように考え発想していくか考えていかなければならない。地域で活用できるものをきちんと整理した上で教育行政として投げかけていかないと学校には響かない。そこは私の責任と思っている。また、これまでの取組みを標茶小学校の中だけに納めるのではなく、積極的に発信していかなければならないと考えており、そうしたことが、教育委員会としての役割であろう。

高橋座長 教員研修というものの存在が大切になってくる。

蠣崎委員 標茶町の教育研究所では理科部会がある限りは、継続して湿原をテーマとして扱っていくだろう。

加藤委員 地域の人的物的資源を有効活用することが今後非常に重要になってくる。そういった意味では湿原の活用も大事になってくるだろう。我々を含めて教員がそれをわかっていな

いと学習に踏み込むこともできないので、教員研修は大事なものになってくる。鉏路町でも教育研究所の理科部会が何年か続けているようだが、総合的な学習の時間での活用であれば理科に限った事ではないので、もう少し広く声をかける必要もあるだろう。一方で、新学習指導要領が始まるため、教科の授業をどのようにしていくのかという研究も大事になってくる。授業を中心とした取り組みをしていくことを重点として移行しつつあり、湿原をとりあげた教員研修に先生方が広く参加するような形にしていきたいと思いつつも、難しい状況にもある。

高橋座長 様々な先生が研修に参加するという事は大切だと思うが。

畠山委員 鉏路教育研究センターにおける湿原をテーマとした講座は、参加人数は少ないがリピーターが多い。教育委員会からも声をかけていくということも必要になるだろう。別の研修講座との日程の兼ね合いも出てくる。

富田委員 湿原教育の必要性が理解されないと先生方も参加しない。学校間、市町村間でその効果を情報共有していけると多くの先生方がもっと前向きに捉えるのではないかな。

高橋座長 まだまだ働きかけが必要であろう。意見を参考にさせて頂きたい。次に移るが、取組の広報、実践の喚起について意見をいただきたい。資料には、基本的には常識的な広報の方法が記載されている。問題は学校単位での広報である。紙媒体以外にもそれぞれの学校へ働きかけて行くということであるが、実際に学校を訪問するのか。

事務局 教育委員会の方から可能性がある学校について情報提供いただいた上でアプローチしたり、教員研修に参加いただいた先生のつながりから関係をつくっていききたい。

高橋座長 結局は人間関係が基本になる。それは多くの努力が必要になってくる。

境委員 湿原を題材にしようとする先生がいるとすれば、個人的な先生の意欲と校長先生の考え方。校長先生がやるぞという時に大きく動く。やはり人間関係が基本になる。道東の学校は保守的なので、新しいことをやる事に関して抵抗感がある。そこを破らなければ、なかなかできない。しかし、それを破った学校は、様々な事をどんどん取り入れていくので変わっていく。鉏路小学校もやるぞという時に全体が動くからできるのであって、一人の先生力だけでは難しい。学校が動くぞという時にドンと変わるのだろう。

高橋座長 教育機関は基本的に外からの様々な働きかけがある場所であり、慎重になるのは当然のことであろう。何らかの形で教育的な効果が学校に理解されれば積極的に取組む学校も増えていくだろう。それには少し時間がかかる。次に、学習支援について、WG から協力意欲はあるが、具体的にどのような協力が有効かご意見をいただきたい。何が効果的な支援となるのか。

蠣崎委員 自分たちの住んでいる地域に目を向ける機会として、総合的な学習の時間の活用は、これからも言い続けなければならない。町長の意向もあり、故郷学習の充実を図る場合に、おのずと足元には鉏路湿原があるので鉏路湿原に目を向けてクローズアップしていくという発想が出てもおかしくない。そのきっかけとして、町が予算をつけて、標茶町の公立小中学校にいる9年間の間に1回は必ず鉏路川の川下りをするという仕組みを作ろうとしている。川から風景を見て、肌で感じ、空気感を感じることで意識も変わってくるだろう。そういった切り口も含めて、もっと地域探求を充実させませんかという発信を行っていくことになる。

川下りの際に、環境省のレンジャーの方に一緒にボートに乗ってもらえることができれば、ありがたい。小学生だけではなく中学生も含まれ、レンジャーの方から現場でお話を聞くだけでも違って来る。地元のカヌーガイドからの説明もあるが、ただ下るだけではなく学習として効果を高めるために、どのように仕組んでいくかということが大切になってくる。こちら側の考え方次第であり、現在、宿題として課せられていることでもある。

高橋座長 大変興味深い。総合的な学習の時間を有効に使う為には、基本的には地域の様々な

歴史や文化、自然に関心を持つという事であろう。その中のとても大きな要素として、例えば標茶町や鶴居村であれば釧路湿原がある。それは地域の宝物であり、様々な事で私たちに影響を与えており、十分学習する価値があるだろう。そのために、様々な形での支援の手立てを考えたい。必要なことがあれば言っていただきたい。

蠣崎委員 地元のガイドもついて学習面、安全面の確保も含めて行うこととなるが、例えば環境省のレンジャーとの適切な役割分担など、検討すべき点は多くある。

境委員 国交省の河川事業団などの支援金も検討されるとよい。

蠣崎委員 100%町財政からという発想ではなく、様々なルートを手繰っていくことも必要になる。

高橋座長 何度か川下りをしたことがあるが、地元のガイドからは、ある程度の説明と観光案内のようなことが多かった印象がある。もう少し本質的で具体的な説明もあるとよいだろう。

加藤委員 別保小学校の事例のように、身近なフィールドで学習する時にアドバイスや学習のコーディネートを行ってもらえると大変ありがたい。教育委員会でも連携を取りながら進めていければと考えている。また、学校では2学期末から冬休みを挟んで1年間の評価を行っていく時期になり、広報を考える際に、4月に入ってではなく年度末までに次年度の検討材料としてチラシが学校に届いているほうがよい。

畠山委員 いろんな先生方がいる。自分で調べ自分でやっていく先生もいれば、やりたいけどやり方がわからない、いろんな資料を見て組み立てることは難しいと思う先生もいるだろう。良いものであれば、そのままそれをお願いしますという先生もいると思うので、今あるものを整理しながら、こうした取組みが出来るというメニュー表みたいなものがあれば、先生たちもイメージでき、関心を持つ先生もいるだろう。

高橋座長 これまでの取組みや成果を積極的に学校にアピールしていきたい。

富田委員 事例集などで情報共有することで新たな学校に働きかけていくことはできる。また、学校としても新しいことを始めるのは難しい部分もあるので、総合的な学習の時間の中で今行っている活動と湿原教育を結び付け、湿原を学ぶことによってどうつながっていくかというところに目的を置いて、拡がりを考えていけるとよい。

高橋座長 プロセスを重要視するという事に全てつながっていくように思う。

境委員 学習指導要領が今回変わるという事で、その大きな転換点になっている。今までは知識ベースだったが、資質ベースに変えていこうとしている。これからは知識をどう活用できるか含めたり、学ぶべきプロセスをどう学んでいくか、そういった事も重視する方向に変わっていく。このため、今までは何かを求めなければならないような調べ学習が多く、結果を出すだけだった。子どもたちが疑問を持つ前に結果ありきの調べ学習だった。これからは子どもたちがつくっていくために自分が問題を見出し、どのように解決するか、そこを考えていくことが大事になっていく。文部科学省の方から現代的な課題ということで、多くの様々なことが出されているが、その現代的な課題の中にも環境が含まれており、様々な自然を守るにあたって、単に方法と結果が大切なのではなく、そのためにどう考えるのが重要であり、考える力をつけるために湿原が非常に良い題材になっていく。

高橋座長 時間になったので本日の議論はここで終わりとしてほしい。様々な貴重な意見をいただき感謝したい。本日いただいた意見を参考にして、企画を考えていきたい。以上で本日の議事を終了する。事務局にお返りする。

事務局 委員の方には引き続き次年度の参画や異動の引継ぎ等をお願いしたい。これで第8回学校支援ワーキンググループを閉会する。